

梁啓超の『和文漢読法』をめぐる日中批評史に関する一考察

李 海

1. はじめに

『和文漢読法』は梁啓超（1873～1929）が来日後、同郷の羅普（字孝高、生卒年不詳）と共同で編纂した日本語学習本である¹。

『和文漢読法』に関するこれまでの評価は次の通りである。発売当初、蔡元培（1868～1940）はそれを高く評価し、日本語の学習の現場に応用し、学生たちに『和文漢読法』を薦め、日本語の学習や、日本語著作の読解、翻訳に用いている。三十年代には、周作人（1885～1967）が随筆「和文漢読法」の中で「『和文漢読法』の影響は今なお絶大であって、一方で日本語の習得を奨励しながら、一方では誤解の種をまき日本語をひどく易しいものに思いこませる、といった二つの事態がいままで続く」²と述べ、日本語の独自性を強調するため、『和文漢読法』の批判を行った。

九十年代になって、夏曉虹氏は『和文漢読法』（1999）なる一文を発表し、この研究の第一人者となり、夏氏の紹介によって、京都大学文学研究科図書館所蔵の版が確認された。その後、『和文漢読法』に関する研究が急増し、比較文学、中国近代史、または日本語教育史などに関連する分野の人々によって、研究されてきた。

『和文漢読法』は、発売から今日まですでに100年以上の歳月が経ったが、それが評価され続けられて来たこと自体非常に興味深いことである。『和文漢読法』をめぐるその評価に触れている論文はいくつか見られるが、これまでに歴史の変遷を軸とした『和文漢読法』に関する評価を検討する論文は未だ見つけられない。したがって、本論文では『和文漢読法』への評価を発売当時、三十年代、九十年代、そして日本での評価に分けて列挙しながら、その評価の経過と原因について論じたい。

2. これまでの『和文漢読法』の評価

2.1 発売当時の『和文漢読法』

『和文漢読法』は、日本で販売され、留学生に大好評を得ていたが、さらに、『清議報』が出した広告から、『和文漢読法』は上海でも販売されていることが判る。当時、中国でも『和文漢読法』が広く読まれていた。また、教育家として高名な蔡元培もこの『和文漢読法』と深く関わっていた。

1897年10月、蔡元培は東文書社を籌画する際に、日本語を学び始めたという³。1898年8月、蔡元培は紹興中西学堂の校長に就任し、学習カリキュラムを改革し、外国課程に日本語を追加した。その後、蔡は1901年8月、上海南洋公学⁴の総教習(教頭)に命じられたが、彼はここにおいても教育改革に着手し、南洋公学特班では9月のカリキュラムが初級と上級のクラスに分けられ、上級のクラスでは、外国語という授業科目に「和文漢読法」が追加された。

そして、注目すべきことは、教授する科目は日本語と密接に関連する文字が残されていて、例えば哲学の科目では、注釈に「和文可訳」(日本語訳、可能)と書かれ、博物という科目では、「用和文植物学訳講」(日本語の著作「植物学」を用いて訳しながら講ずる)と書かれている。このカリキュラムでは『和文漢読法』を重視し、かつ教員側では、日本語の著作を訳しながら講義をするという実態が見うけられる。

さらに、蔡氏の日記から和文漢読法を用いて日本語を習得していることが見られる。

介石が来宅、一緒に日本語学堂へ行き、その後、燕生、州髓を訪問、州髓は『寄学速成法』印本の不備を示してくれ、『和文漢読法』は詳細だと言った。(1901年11月20日)

学生諸君のうち、和文漢読を学びたい者があれば、即日授業を始める。その後、月曜、水曜は和文漢読の授業日と定める。(1902年2月17日)

クラスメート全員、和文漢読法を学び始める。(1902年3月21日)

上記の日記から、蔡元培は教育での現場では『和文漢読法』を用いていることが明らかになったが、果たしてその成果が現れただろうか。蔡元培は1936年4月「三十六年前の南洋公学特班を記す」一文の中にこう記している。

そのころ、学生の中で、英文を読める者は甚だ少なかった。学生達は皆、日本語で書かれた書物を読もうと思い、私は彼らに日本語を学ばなくても

日本語が読める、つまり徹底的ではない方法を彼らに教えた。そして何日も経たないうちに、皆日本文を読むことができるようになり、翻訳する者も出てきた。⁵

と大変誇り高く述べている。つまり、非常に喜ばしい成果があったからである。そして、彼のいわゆる「徹底的ではない方法」はすなわち、日記にも記している「和文漢読法」である。蔡は「和文漢読法」が徹底的ではない学習法と知りながら、自信満々に述べているのはなぜだろうか。その原因は恐らく少ない労力の投入で、多いに収穫が得られることにあるだろう。王昇遠氏の研究によれば、当時、南洋公学特班に在籍している蔡元培の教え子邵力子（1881～1967）は梁啓超の『新民叢報』に「ダーウィン、ハクスリー、スベンサーらの著書について、『天演論』を除き、その他の諸書に、日本では訳本があるでしょうか？御乞返事。」という内容の投書を掲載していた。この投書の内容について、王氏の解釈では邵力子の投書の目的は日本語で訳した名著を中国語に重訳するためである。確かに邵が目的を明言しない限り、投書の目的は日本語の訳本を探して、訳しようとしていることは否定できない。しかし、少なくとも、これを見れば、邵力子を含め、『和文漢読法』を使い、日本語の読解能力を身に付けた学生らはすでに、自発的に日本語の本を探し読んでいたと言える。現に、邵の同窓である李叔同（1880～1942）は日本人玉川次致の『法学門径書』と、太田政弘、加藤正雄、石井謹吾が著した『国際私法』を翻訳した⁶という。

以上、『和文漢読法』による学習の成果について、蔡元培がそれから36年後の回想録においても、『和文漢読法』に肯定的な態度を示している。だが、蔡元培は『和文漢読法』の弱点をもはっきりと認識していた。その弱点は、つまり、話すことによる交流は困難であるということである。ただ、『和文漢読法』の著者梁啓超自身は日本語の学習には話すことを目的とせず、もっぱら日本書を読めるようにすることを目的としていた。この点に関して、蔡元培も同じ考え方を示した。蔡元培の日記から、彼は1897年から日本語を学び初めたが、一年経っても日本人教習との会話交流ができず、筆談を余儀なくされたことが分かる⁷。しかし、この点について、蔡元培は全く気にせず、「私は日本語はしゃべれないが、日本の文章を読むことができた」⁸と述べている。

蔡元培は『和文漢読法』の弱点を知りながら、それを高く評価したのはなぜか。それは『和文漢読法』が有する即戦力性にあると考えられる。今日われわ

れの経験から見れば、一つの外国語を習得するには、特別の才能のある人を除き、普通の人では長い時間と膨大な精力を費やしてこそ、はじめて修得出来るといえよう。この長い学習道には、苦勞はつき物である。しかし、蔡元培の日本語学習には苦勞したような記述は見られず、対照的に、蔡元培はドイツ語の学習には苦勞したようである。翻訳はもちろん、ドイツ語を理解することさえ容易なことではないと蔡元培の回想文から読み取れる。

私はベルリンに一年間滞在し、毎日、何時間もドイツ語を学び、何時間も国学を教え、何時間も商務印書館のために本を編集し、そして何時間も同窓生との付き合いに使い…と、実に忙しい。ドイツ語の進歩は甚だ遅い、もしこのような繰り返しで、何にも得られずに帰国するのは惜しいことではないか。⁹

蔡元培自身の日本語学習は短時間に、成果を上げている。今日のわれわれが驚く程の上達スピードで日本語を使いこなした。前に述べたように、彼は1897年10月に、日本語を学び始め、そして翻訳を始めたのは、わずか8ヶ月後のことである。彼の日記には

『日本小文典』の序を訳す。(1898年6月22日)

日本『農会報』を訳す。(1898年6月25日)

『万国憲法』を訳す。(1898年7月1日)

夜『俄土戦史』の数頁を訳す。意味が明白で、自由に文章が表現できる楽しみがある。(1898年7月9日)

特に、1898年7月9日の日記では、翻訳することに楽しみを感じ、外国語としての日本語を自由に扱う様子がうかがえる。

当時、中国の知識人の日本語に対する認識はもっぱら西洋知識、文明を吸収する手段にすぎないと考えていた。多くの青年たちは、救国の活路を求めため、日本に留学してきた。その上、時間をかけて日本語を学習する社会環境も備わっていなかった。さらに、梁啓超の著作が当時の青年たちに愛読され、梁は「日本語を学ぶ益を論ず」などの文を書いて、『和文漢読法』を宣伝した。そして、蔡元培は日本語学習の段階では、『和文漢読法』を学生たちに薦め、教育の現場で活用し、かつ自ら『和文漢読法』を用いて、日本語の著作を読み、翻訳も行なって来たのである。

2.2 三十年代における『和文漢読法』

三十年代における『和文漢読法』についての評価として、周作人が書いた同名の随筆「和文漢読法」がある。周の文章から『和文漢読法』の評価に関する部分を取り出し、それを概観してみよう。

梁任公が、『和文漢読法』を著したのは何年かはっきりしないが、いずれ庚子（1900）のころだったろう。すでに三十年余りにもなるのに、その影響は今なお絶大であって、一方で日本語の習得を奨励しながら、一方では誤解の種をまき日本語をひどく易しいものに思いこませる、といった二つの事態がいままで続く。¹⁰

さらに、周作人は黄公度の日本語に対する見解を例に、日本語の独自性を強調した。梁啓超の「和文漢読」を適用する漢文調の日本語は三十年代になって、次第に使われなくなった。周は日本語学習について以下のように述べている。

言葉にはそれなりの生命があることを知り、それに対して何分かの愛着と理解を抱くまでになる必要がある。そうなるには、根本的に口語から入り、さらに名家の書いた文章を多いに読んで始めて、本当に分かってくるのであって、規則を何十条か覚え社会科学書に数冊を通した程度で到達できることではない。そこで次の意見はこうである。日本語を習うにはせいぜい悠長に構えて、なるべく多くの時日がかかることが必要で、やむをえぬ場合はともかく、くれぐれも速成を求めるべきでない。蓋し、天下には、速成ということは不可能である。¹¹

以上から見れば、周作人は『和文漢読法』を用いて、日本語を学ぶことに反対し、速成教育を求めるべきではないと表明した。だが、疑問点はいくつがある。まず、周の記憶によると梁啓超の『和文漢読法』が持てはやされたのは1900年前後のことである。周のこの『和文漢読法』を評する随筆は1936年に公表したものである。つまり、三十年前の印象と現在の状況を総合した評価であって、その重心を三十年代に置いたことがわかる。

1901年8月、16歳の周作人は南京の江南水師堂に入学、その時彼は梁啓超の著作に夢中になっている様子が日記から見るができる¹²。『和文漢読法』は当時上海でも販売されているし、周作人自身が日本へ留学するに当たって持っていく書物の一冊として日記の中に明記している¹³。このように、文学の面では、当時、周作人は梁啓超の文筆の恩恵を多いに受けたようである。

だが、1900年代の社会においては、法政速成は時代の潮流であり、日中両国教育の有識者たちの共通認識だったといえる¹⁴。周作人はむしろ特殊な例だったと思われる。当時、十代後半から二十代前半の若者が、文壇の風雲児に異を唱えたとは考えられないが、周作人の梁啓超に対する批判の種はすでにその時期に蒔かれていたのである。『周作人評伝』では、来日初期における周の動向を紹介している。

当時、ほとんどの留日学生は、明治維新の成功経験や、西洋文明の経験の速やかに会得し、日本文化と西洋文化の一致、或いは共通性に着目した。しかし周作人は、あえてこの功利観念を避け、彼自身の性格や、好奇心といにしえを思う精神から日本文化と西洋文化との違いの根源に注目した。これは一種の純然たる主観的な鑑賞の態度である。¹⁵

もちろん、文学における個人の好みは周作人本人の性格に由来するところが大きいですが、やはり、二人の文学観の相違に『和文漢読法』に対する判断が大きく関わっていると思われる。梁が『和文漢読法』を書く意図を取り上げて比較すれば、周作人とずれていることが明らかである。梁は『和文漢読法』を書く前、彼の師である康有為の「日本書目」を読み、感想文として「日本書目録読後感」を残している。

泰西諸学の書は、その精たるものを日人がすでに略訳しているので、われはその成功によってこれを用いるべき、泰西を牛とし、日人を農夫として、われは座ってこれを食べる。¹⁶

ここでは梁啓超の意図がすでに見られる。彼は『和文漢読法』を書いたあと、「東籍月旦」(日本語著作に対する論評)という文章を発表した。それを見ると、さらに、日本書を通じて、西洋の科学文明を視野に入れていたことが明らかである。そのなかに挙げられた書物は政治類、法律類の書物がほとんどである。周作人が言った俗文学の本は一冊も含まれていなかった。つまり、梁啓超の考えでは、留学生が日本語を学習するのは日本の法律、政治を学ぶためであり、けっして俗語が多く含まれる俗文学を学ぶことではない。周作人は「和文漢読法」において、日本文についてこう述べている。

今日の日本文は、おそらく法律関係のが一番読みやすいだろう。次は社会、自然科学で、文芸が一番難しい。さすが仮名一本槍の文章こそないが、な

にしる市井の細民閭巷の婦女のことを書いているので、口語から入らなければ理解しかねるわけだ。¹⁷

つまり、政治のような文章においては、漢字が多く取り入れられているため『和文漢読法』の力が発揮できるが、文芸など多くの俗語が含まれている文章には、『和文漢読法』の力は発揮できないということである。周はもっぱら俗文学に注目し、両者は正反対の方向へ向かうことによって、意見の対立も当然のことであろう。

そして、三十年代になり、周作人自身が提唱している“平民文学”の一環として、日本の大衆文学を精力的に紹介している。彼は日本の大衆文学に関する多くの散文、随筆を発表し、「日本管窺」、「東京散策記」、「日本語について」、「日本話本」はその類のもので、「和文漢読法」がその中に含まれていた。梁啓超が編纂した『和文漢読法』は漢文調で書かれた日本語の読解には大いに役立つが、結局俗語の分野では力を発揮できないという主張が周作人のこの文章を書いた狙いであった。周は随筆「和文漢読法」の結びのところで、文学は俗という潮流にあり、梁の『和文漢読法』は俗文に対応できないと指摘した。

以上、周作人は三十年代に、日本文芸研究者の立場で、自ら打ち出した“平民文学”の一環として、梁の『和文漢読法』を取り上げ、俗語の世界では『和文漢読法』はほとんど力を発揮できないことを指摘し、もっぱら語学的な意味、文学的な面で、『和文漢読法』を評価した。その評価の背後には、大衆文学を重視する姿勢が存在し、平民文学推進の一環であったと考えられる。

2.3 九十年代以来の『和文漢読法』評価

三十年代後半から八十年代まで、この間、中国では抗日戦争、内戦、文化大革命などの社会的混乱が続き、学術研究の環境が備わっていなかったと考えられる。また、『和文漢読法』は梁啓超研究の一部であったので、その評価も梁啓超研究の動向に大きく左右される。中国では、梁啓超は革命派の孫文とは対照的に取られがちで、長期にわたって、評価されなかった。しかし、改革開放を気運に、文学、思想の自由化も進み、特に九十年代に入って、梁啓超研究も盛んになり、『和文漢読法』の評価を含めたいくつかの論文がようやく見られるようになった。

『和文漢読法』研究のきっかけを作った夏曉虹氏は論文「梁啓超与『和文漢

読法』の中で、こう評価している。

梁氏のこの小冊子の流行は、清末知識界の新しい知識を学ぼうとする気運の高まりの表われであると渴望を持たせた。(中略) 実は、梁啓超はこれに対して、早くも自嘲的なことばを残している。「わたしは『三字経』の冒頭「人の初、性はもと善なり」の「性はもと善なり」まで読めば、人に「人の初」を教えた。と、あとにつづく「性は相近し」以下をまだ読んでいないから「人の初」の一句をも理解できないだろう、とは考えなかった。このような教え方をすれば、人を誤らせずにはすまないであろう」。しかるに、これこそ任公先生の愛すべきところである。今日、梁氏のように倦まずたゆまず、高潔な方法で人を教授し“道を伝え、業を授け、惑いを解く”人ははたして何人いるだろう。¹⁸

夏氏は、梁の『和文漢読法』は清末の知識人が新しい知識を求めるための、時勢に答えた本と評価した。と同時に、その弱点も指摘した。それは梁氏自身が習得した知識をすぐ他の人に伝えるという未熟さである。実は、これらの評価は、梁啓超自身の『和文漢読法』に対する評価でもある。この本は時勢に答えた本と彼はすでに認識していた。ゆえに、彼は「論学日本文之益」（日本文を学ぶ益を論ず）の中で、『和文漢読法』を学習者に薦めた。

私は『和文漢読法』という本を編纂している。学習者はこれを読むと、少しの労力をも費やさずに、たくさんの日本語知識が得られる。これは偽りではない。私の友達は多く経験した。¹⁹

いわゆる未熟さ、つまり、学問に対して、厳密ではないことも梁は自覚していた。

私は日本に来たばかりの時、同窓羅君（羅普、字孝高）に付いて日本語を学んだ。羅君は簡易な方法で私に教えてくれた。その後、相次ぎ日本に来た中国人は、私に日本語を学ぶ方法を問う。そのため私は『和文漢読法』を著し、彼らに教えた。これは己亥（1899年）夏、五、六月の間のことであった。その本はわずか一昼夜で完成されたため、いい加減なところが多くて、その上、その時の私はまだ日本語の文法に通暁していなかったため、とりわけ誤りも少なくなかったと思う。ただこれは、一二の親友に見せるだけのもので、世に出すのは恐縮である。私の西遊後、学生諸君が勝手にそれを出版し、今しばしば版を重ねり、しかし、再び読むと汗顔なり。²⁰

夏氏は梁の矛盾点を押さえると同時に、評価したのは、師者としての、「道を伝え、業を授け、惑いを解く」の美德である。倦まずたゆまず、自国人に未知な知識を紹介しつつ、啓蒙思想家として果たした功績が大きいことは否定できない。

2002年、『日本学刊』に北京日本学研究センターの徐一平氏の「中国的日本語研究史初探」なる一文が掲載された。論文は梁の『和文漢読法』を取り上げ、こう評価している。

この種の読書や新聞を読む等、ただその大意が分かることを目的とした「和文漢読法」は、短期的な問題の解決や、あるいは短時間内におけるの閲読という目的を達成できる点では評価できると言えよう。ただしこの方法は、結局は本当に日本語を身につけたとは言えない。しかもたとえ理解したとしても会話での交流はできず、一種のしゃべらない日本語にすぎない。前文で言及したようにこの方法は、西洋の宣教師らの口語に着目し、方言の理解にも勤め、本当に普通の日本人との交流を可能にした方法と比べて、科学的ではない、あるいは遅れていると認めざるを得ない。さらに重要なのは、梁啓超のような革新的な政治家でさえ、日本語をこのように見なした。「和文漢読法」を用いて日本語を学習するならば、必然的にほかの人に影響を与えることになると思われる。²¹

徐一平氏は、梁啓超の『和文漢読法』を中国人の日本語研究史の中において重要な段階と位置づけた。発売当時の段階において、『和文漢読法』は短期間において、読解可能という目的が達成できるという効能を認めた。しかし、梁啓超の社会的影響力を持つ啓蒙思想家としての立場で考えれば、このような非科学的な学習法を広げたことは、彼の影響力が絶大であったゆえ、多大な悪影響を及ぼしたと指摘した。そして、それから長期にわたって、中国人の日本語に対する認識が「実詞は前に、虚詞が後ろに、逆さまに読めば、数日で小成し、数ヶ月で大成なり」の漢文体系であることは、梁啓超がその時期に提唱した『和文漢読法』と関係があるとも述べている。

徐一平氏は、梁の影響力に注目し、論を展開している。日本語を学習する人に、必然的に影響をもたらすと言い切った。しかし、筆者は徐氏の論はやや梁の影響力を過大視していたのではなかろうかと考える。もちろん、清末における梁啓超の影響力を否定する気は毛頭ないが、むしろ、日本語を学んだ中国人の感覚として、日本語の中に、漢字が数多く含まれていることが、我々の日本

語に対する理解を助けているということを主因に挙げたい。この点については、果たして梁啓超と如何なる関わりをなしているだろうか。多くの場合は、梁は人々の認識を率直に表現したといえよう。また、周作人が指摘したように、30年代において、『和文漢読法』はすでに目にすることが難しい状況にあった。増して、今日『和文漢読法』を目にした人、『和文漢読法』の存在を知っている人は何人居るだろうか。『和文漢読法』を目にしたこともなく、『和文漢読法』の存在さえも知らない我々の日本語に対する認識を、梁啓超に影響されたと言いつけるにはかなり無理があるのではなかろうか。

最近、陳力衛氏は「梁啓超の『和文漢読法』とその「和漢異義字」について——『言海』との接点を中心に」という論文を発表し、その第四節において『和文漢読法』の影響を取り上げて論じている。陳氏は言語学の面における影響を中心に、「辞書への影響」と「文体の変化と連動して」、との二小節に分けて分析した。辞典への影響について、「『和文漢読法』の流行により、日本語学習のブームも高まり、いわゆる「速成教育」がひとつの現象ともなっていた。例えば教育者の蔡元培が上海南洋公学でこの方法をもって実践したり、出版界では、日本においても中国においても、速成的な教科書や和文奇文類の冊子を次々と世の中に送り出していたという。また、もうひとつの「文体の変化と連動して」では、当時日本に留学している魯迅、周作人の見解を論拠に、明治時代まで、日中同文は時代の特徴であって、明治時代の日本語の文体は和文漢読が可能であると指摘する。しかし、明治以後、日本語文法にかなりの変化が見られ、『和文漢読法』は使えなくなった。論文の最後に著者は「この時代（明治時代——李注）に「同文」によってもたらされた文化的、思想的事項を丁寧に追って整理する必要があるのではないかと思う」と期待している。

陳氏の論文の結びのところに、「梁啓超を始めとする近代中国知識人の日本体験が一体どうなっているか、とりわけ当時の日中間の言語問題をどう捉えていたかを、『和文漢読法』という小冊子の増補と普及から、ある程度垣間見ることができよう。基本的に「同文」にしがみついてなるべく最大限に自身の漢文の力によって日本語を理解しようとする姿が目に見えてくる。その結果、どんなものでもいち早く日本語から中国語への移入を目的とするあまり、消化不良で、生半可な理解を伴うのもあの時代の産物である²²。」と述べている。

陳氏は『和文漢読法』と日本の『言海』との接点、特に「和漢異義字」を中心に論じている。言語学者である陳氏は『和文漢読法』の思想史、文化史に与

えた影響についての言及を避け、それらをこれからの問題として論を結んでいる。陳氏の論はこれまで、文化史、思想史における梁の『和文漢読法』の影響の評価とは異なり、「辞典への影響」及び「文体の変化と連動して」の面で梁の『和文漢読法』の影響を評価した。ただ、実藤恵秀氏の著作『中国人留学日本史』には、当時中日両国が編集した日本語学習本を見てみると、『和文漢読法』は中国人が編集した最初の日本語学習本ではない。『和文漢読法』は数多くの日本語学習本の中の一冊にすぎず、むしろ先行して発行された日本語の学習書が『和文漢読法』に影響を与えたことも否定できない。また、梁の『和文漢読法』と同名の著作も存在するため²³、一概に『和文漢読法』が辞書の編纂に与えた影響を語ることはできない。結局陳氏論文のタイトル「梁啓超の『和文漢読法』とその「和漢異義字」について」が記したように、すべて功を梁啓超に帰するという誤解をもたらすだろう。多くの研究者は梁啓超の名声のみに注目して、他の日本語学習書が『和文漢読法』に与えた影響を見過ごしているのではなかろうか。

3. 日本における評価

『和文漢読法』は中国人の注目を集めただけではなく、日本における中国人への日本語教育に携わる日本人にもその存在を知らせたのであり、彼らも『和文漢読法』について幾つかの意見を述べている。

中国人留学生の日本語教育に携わっていた船津輪助²⁴は「和文漢読法」にはっきりと賛成の意見を表明した。小川博氏の研究によれば「明治三十五年一月十九日に東京同文書院という中国人留学生教育機関が開設した。[中略] 成田山史料館に所蔵される柏原文太郎文書の中に「校長犬養毅、監督兼教習柏原文太郎、教頭梁啓超、支那学支那文学教習麦孟華 [中略] 日本語日本文教習船津輪助」(「船津輪助のこと」 p 240)というその頃のものらしい教員についてのメモがある。船津は『教育学术界』の第2巻第6号(1901年4月3日発行)で、「如何にして支那人を教育すべきか」という文章を発表した。その中では、「支那人の長所」として、四つの特徴をあげている。その一つは「和文漢読の法ある事」である。以下はその一段落を全部引用する。

此れは頭脳に關係せる物ならねども日本と支那とは兎に角同文の国なる故如此便利の事あり、和文を転讀するときは容易に書を讀み得、一月半位注

意して学べは大抵の日本書は大意だけよむを得、日本書を日本風によむ事は困難は甚しく到底日人が漢文をよむ比にあらず、一二年の豫備にては中々正當に讀めるものにあらず。

船津の意見では、日本語の中に大量の漢字語を取り入れたため、助詞の意味と用法がわかれば、日本語の読解は容易である。これこそ、梁啓超の『和文漢読法』が注意を払ったところである。そして船津も梁啓超の見解に賛成し、中国人への日本語教育では、『和文漢読法』の普及を推薦した。

また、船津輪助の『和文漢読法』を使用すれば「一ヶ月半位注意して学べは大抵の日本書は大意だけよむを得」と梁啓超が言った「若し簡便の法を用いて以てよくその書を読むことを求むれば、則ち慧者は一旬、魯者は兩月にして、以て一卷を手にして味の津々たるべからざる事無けん」を比較してみると、船津は『和文漢読法』の効果を認め、彼は梁啓超の観点をういたことがわかる。最後に、日本語学習の認識において、船津は梁啓超と同じように、学習者の誤解を避けるため、日本文を日本語の発音で忠実に読むことは決して容易なことではないということを付け加えている。

当時、中国人の日本語教育を携わる日本人にも『和文漢読法』と接することがあり、船津輪助は『和文漢読法』が中国人留学生の日本語学習において有効であったことを認め、日本人の漢文訓読に匹敵する偉大な発明だと賞賛し、『和文漢読法』を高く評価した。日本人は「漢文訓読」という便利な学習法を用いて漢文を学ぶ伝統があつて、日本人にとって、漢文の訓読ができる以上、逆に和文を漢読にすることも自然だと考えたのは妥当なことであつたといえよう。

冒頭にも述べたように、近年、京都大学文学研究科図書館が所蔵している『和文漢読法』が確認された後、日本の学界でもそれについての論文が幾つか発表されている。中でも最も詳細に『和文漢読法』を論じたのは比較文学者の古田島洋介氏の「梁啓超『和文漢読法』(盧本) 簡注——複文を説いた日本語速習書」という論文である。古田島氏は『和文漢読法』の編集・出版及び版本にまつわる諸問題を検討したあと、『和文漢読法』の評価について一節を設けて論じた。その評価は中国と日本に分けて論じている。先ず中国では、古田島洋介氏は周作人評『和文漢読法』と徐一平氏の評を取り上げて論じたあと、作者自らの評価を下した。

しかし、私見によれば、日本語学習が開始されたばかりのころ、たとい学

習方法としては安直であるにせよ、日本語の語順その他に考察を加えた『和文漢読法』は、漢文訓読体の日本文に通用するというだけでも、決して一概に否定すべきものではないと思われる。とにかく当時の中国は、日本語の書籍を通じて、西洋の知識を仕入れる必要があった。それも早急に仕入れねばならなかった。となれば、『和文漢読法』が時代の要請に応えた一書であることはたしかだろう。こうした側面を切り捨てて、単に現代の視点から日本語学習として欠陥を言いつのるだけでは、『和文漢読法』の価値を見誤る可能性が高いのではあるまいか。²⁵

古田島氏は『和文漢読法』の発売当時に視点をおき、当時の日中間の社会状況を考慮し、漢文訓読体は日本の知識人の間に通用しているから、『和文漢読法』の実用性を一概に否定すべきではなく、当時中国は政治体制等において危機的な状態に陥っていて、早急に西洋の知識を仕入れる必要があるという時代背景に注目した。これは『和文漢読法』は日本語学習という次元での問題提起ではなく、社会変革の必要性という次元での問題意識があると提示した。つまり、梁が編纂した『和文漢読法』は日本語の学習だけに注目すれば、もはや梁の狙いとは大きくかけ離れていて、研究者自身の都合のよい取り扱いにされたといえよう。梁の狙いをより理解すれば、高い評価が得られるのではなからうか。

そうすれば、むしろ「『和文漢読法』が時代の要請に応えた一書である」と古田島氏は高く評価している。

一方、日本側での『和文漢読法』をめぐる評価については、古田島氏は挙げていない。氏の推測では、「とにかく、『和文漢読法』を目にした日本人の数があまりに少ないことである。皆無も同然と断じてよいのではなからうか。」「(『和文漢読法』)はもはや歴史的な存在にすぎぬ。」と結論を結んだ。

しかし、上文で論じた日本人による評価は、筆者が新たに梁啓超の同僚による評価資料を発見したことによって、当時日本人も『和文漢読法』と接触していたことを証明し、かつ日本人が高く評価していた事実が明らかになった。興味深いのは、100年前の船津の『和文漢読法』の評価と100年後の古田島氏の評価はいずれも当時の社会状況に目を配り、100年の時代変遷を経たにも関わらず、両者の評価は大同小異であった。この原因は、やはり日本人は客観的な立場にいたところが大きいと思われる。さらに、古田島氏の論文の発表のほぼ同じ時期に、前田均氏は『和文漢読法』に関する論考を発表していた²⁶。この一冊の本は、今後日本人に大いに注目されることと予想する。

4. 結び

以上のように、本論文は史的視点から『和文漢読法』の評価を見てきた。その発売当時には、蔡元培が上海にて教育の現場に用い、大きな成果が見られた。三十年代に至って、周作人は大衆文学という自らの文学理念を主張し、日本文化の独自性を鼓吹するための一連の文章を綴っているが、『和文漢読法』を評価する文章はその中に含まれている。周は、発売時に比べ、日本語に変化が見られ、現在では『和文漢読法』の適用が出来ないことを強調し、『和文漢読法』を低く評価している。これは、当時俗文学に傾注している周作人の都合による独自評価とも言える。

九十年代に入ると、『和文漢読法』に関する評価はさまざまな分野の研究者から異なる評価が下された。夏曉虹氏は文学、史学の視点、徐一平氏は日本語教育史の視点、陳力衛氏は言語学の視点からそれぞれ評価を下している。共通点として各自共、理性的で、比較的公正な評価を与えている。そして、これまで日本人による『和文漢読法』の評価がなかったという古田島氏の発言をヒントに、筆者は日本人評『和文漢読法』の資料を新たに提示し、古田島氏の評価と対照しながら、日本人が如何に『和文漢読法』を評価していたかについて検討した。

最後、本論を結ぶに当たって、次のことを付言したい。京都大学文学研究科が所蔵している貴重書『和文漢読法』には「鈴木豹軒先生手沢」という細長方形印が捺されている。この点について、夏曉虹氏や古田島氏も指摘したように、かの高名な漢学者鈴木虎雄（1878～1963）氏の蔵書である。従って、単に鈴木氏が漢学に関心を持ち、多くの蔵書の中の一冊本だと考えるのは恐らく間違いであろう。筆者の調べでは、当時日本新聞記者でもある鈴木虎雄（当時は大橋虎雄と名乗る）は梁啓超の同僚である。当時の東亜商業学校の留日学生写真には、梁啓超の隣に鈴木虎雄氏が座っている²⁷。このような経歴から、鈴木虎雄氏が梁啓超の著作を収蔵していたとしても不思議ではない。今後、梁啓超と鈴木虎雄の『和文漢読法』をめぐる交渉が如何なるものであったかなどの問題も究明すべきだろう。この問題については別稿に委ねることとしたい。

※ 本稿は、2009年4月25日の中国現代史研究会中部例会にて、口頭発表したものである。

注

- 1 『清議報』第十冊（1899.2）に梁啓超自身の文章「日本語を学ぶ益を論ず」に「私は『和文漢読法』を編纂した。これを学習すれば、少し頭を使わずに、莫大な成果を上げられよう。」と認めた。また、同窓である羅普の「任公逸事」に二人合同で『和文漢読法』を編纂したことを記録していた。「お互いに検討を重ねて、若干の通例（全四二節）を定め、初めて日本語を習うものに、いきなり中国語の語法を従って返り読みさせてみたところ、十中八九、それで通じたので「和文漢読法」を著して出版した。完璧とは言えないものの、その効果はなかなか大きかった」。島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第一巻、岩波書店、2004年、p289。
- 2 周作人「和文漢読法」『苦竹雜記』実用書局、1972年、p257。訳文は木山英雄編訳『日本談義集』（平凡社、2002年、p208）から引いたものである。
- 3 『蔡元培全集』第15巻、浙江教育出版社、1997-1998年、p203。
- 4 南洋公学は1896年清末の洋務派盛宣懷によって上海に創立された中体西用を主旨とする学校である。現在の上海交通大学の前身である、日本の師範学校にならって、附属小学堂、中学、高校、大学にあたる学堂も併設された。（盛毓度「我祖父弁南洋公学的経過」『解放前上海的学校』、中国人民政治協商會議上海市委員会文史資料工作委員会編、上海人民出版社、1988年）pp.33-38。
- 5 『蔡元培全集』第7巻、中華書局、1989年、p67。
- 6 王昇遠、唐師瑶「蔡元培的東文觀与中国日語教育——從紹興中西学堂到南洋公学特班」『中国大学教学』2008年第3期、p87。
- 7 同上、p85。
- 8 『蔡元培自述』2004年、p34。
- 9 蔡元培「我在教育界的經驗」第7巻、中華書局、1989年、p298。
- 10 周作人「和文漢読法」、前掲『苦竹雜記』、p257。
- 11 周作人「關於日本語」p2。訳文は木山英雄編訳『日本談義集』（平凡社、2002年、p156）から引いたものである。
- 12 「夜、同窓黄君明から六月出版した『新民叢報』第十一号を借り、これを読んだ。中には、良い本が甚だ多い、すべて飲氷子（梁啓超のこと）が著したものである。夜中まで読み、就寝に忍びない。いいぞ、いいぞ。私は仰ぎ慕わせる。（1902年7月3日記す）」「午前『飲氷室詩話尺牘』を写し、『新羅馬伝奇』、『新民説』などを摘録する。（1902年7月4日記す）」「夜、『自由書』一冊を借り、読んで、立派なものが枚挙にいとまない。四更（午前1時から3時ごろ）まで、半分を読んだ・・・（1902年7月4日記す）」李景彬『周作人評析』陝西人民出版社、1986年、pp.22-21。
- 13 「兄は浙江省から来て、とてもうれしい。多くの本を持ってきた。（中略）『和文漢読法』を持参する」陳力衛「梁啓超の『和文漢読法』とその「和漢異義字」について——『言海』との接点を中心に」、沈国威編著『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成——創出と共有——』関西大学東西学術研究所国際共同研究シリーズ6、関西大学出版部、2008年、p423。

- 14 北岡正子「魯迅日本という異文化の中で：弘文書院入学から「退学」事件まで」、関西大学出版部、2001年。
- 15 李景彬、邱夢英『周作人評伝』重慶出版社、1996年、p38。
- 16 『飲氷室文集の二』p54、訳文は王勇『中国史のなかの日本像』（農山漁村文化協会、2000年、p252）から引いたものである。
- 17 前掲 pp.257-262。
- 18 夏暁虹『閲読梁啓超』三聯書店、2006年、pp.285-286。梁啓超の言葉の翻訳は小野和子訳『清代學術概論』（平凡社、1974年、p283）から引いたものである。
- 19 「論学日本文之益」『清議報』第10冊、1899年4月1日、p4。
- 20 『新民叢報』第15号“問答”欄（1902年9月）pp.94-95。
- 21 徐一平「中国的日本語研究史初探」『日本学刊』第2期、2000年、p141。
- 22 前掲『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成：創出と共有』pp.423 - 424。
- 23 たとえば、実藤恵秀『中国人留学日本史』（くろしお社、1969年、p62）には、1901年、張肇熊『和文漢読法』を編纂したという記述がある。
- 24 船津輪助（1878～1940）中国の日本語教育に携わる人である。彼に関する著作は1978年の私家版『燕京佳信——船津輪助の北京通信』がある。その内容はほとんど彼の北京滞在期における風俗、見聞に関するものである。解説では、小川博「船津輪助のこと」という文章がある。
- 25 古田島洋介「梁啓超『和文漢読法』（盧本）簡注——複文を説いた日本語速習書」『明星大学研究紀要』（日本文化学部・言語文化学科）第十六号、2008年、p41。
- 26 前田均「日本語教育の歴史、その光と陰（16）和文漢読法」および「日本語教育の歴史、その光と陰（17）続・和文漢読法」『グローバル天理』天理大学おやさと研究所、2008年、p5。
- 27 船津喜助『燕京佳信——船津輪助の北京通信』私家版、1978年、pp.243 - 244。